

<b>8-9</b>			
主題	「医療・障害・福祉」垣根を越えたネットワークについての研究		
副題	手をかさね、心でつながる、ちいきづくり		
キーワード1	ちいきづくり	キーワード2	ネットワーク
		研究(実践)期間	12ヶ月

法人名	社会福祉法人 フロンティア		
事業所名	養浩荘事業部		
発表者(職種)	小山佳貞(介護支援専門員)、長谷川裕基(社会福祉士)		
共同研究(実践)者	竹澤友恵(管理栄養士)、茂崎俊雄(相談員)		

電話	03-3971-6541	FAX	03-3971-8254
----	--------------	-----	--------------

今回発表の事業所やサービスの紹介	社会福祉法人フロンティアは、豊島区、中野区、文京区で高齢者福祉・障害者福祉の事業を展開し、豊島区池袋四丁目にある養浩荘は特養、短期入所、デイ、訪問、居宅、包括が併設された複合型施設として、地域とのつながりを大切に、地域住民が安心して相談できるよう、地域に根ざした施設づくりを行っています。
------------------	--

**《1. 研究(実践)前の状況と課題》**

地域には、制度の狭間に落ち、支援の手が差し伸べられない人や悩みを抱えているが、その切実な声は地域に埋もれてしまい、気づかれない人たちも多く存在する。

一方、社会的弱者と呼ばれる人たちに手を差し伸べたいと思っても、方法がわからず心にしこりを抱える人たちもいる。

地域には多くの医療機関や障害者福祉施設、高齢者福祉施設が混在するが、縦断的な関わりが強い傾向も垣間見られる。また、1事業所のみで支援を試みるも、人材不足等の問題に直面し、適切な支援ができず、業務を圧迫することもある。

地域のニーズに沿い、分野という垣根を越えた支援を展開し、地域住民が住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができるような地域支援、地域づくりが必要であり、課題であった。

**《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》**

**目的**

地域が一体となり交流できる場所を創り、地域の繋がりを拡大する仕組みの一つとなるようにする。また、養浩荘事業部をはじめとする、地域に広がる社会資源の専門性を活かすことで、分野を越えた多角的な視点を持ちより、切れ目のない、より手厚い支援が可能となる。

**仮説**

事業を行う際、養浩荘事業部内の専門職が協力し、施設の専門性を地域に還元するとともに、利用者の日常生活圏域を意識し、関係機関と協働することで、地域住民や専門機関が一体となり、地域交流をすることができる。結果、地域住民にとって、地域とのつながりを実感でき安心した生活をする事ができる。

### 《3. 具体的な取り組みの内容》

#### ①いけよんプロジェクト

[内 容] 関係機関等が定期的に集まり、勉強会や交流会を開催し、横断的な地域交流を行い、地域連携を図る。

[協力者] 医師会、歯科医師会、薬剤師会、地元選出の区議会議員、町会、民生委員、NPO法人、社会福祉協議会、介護保険事業所 等

#### ②アートカフェ（コミュニティカフェ）

[内 容] 障害者施設の喫茶を利用し、コミュニティカフェを開催。高齢者、障害者、地域住民が集い、旬の話題を聴いたり、音楽を聴いたりして過ごす。随時、地域包括支援センター職員による相談を実施する。

[協力者] 認知症サポーター、民生委員、介護保険事業所、社会福祉協議会、障害者支援施設 等

[開催日] 毎月第2、第4月曜日

#### ③顔みて食べよう会

[内 容] 独居高齢者等に声をかけ、お食事会を開催する。1食500円。地域の声や課題から創出した事業。

[協力者] ボランティア、養浩荘事業部 等

[開催日] 毎月第3金曜日

### 《4. 取り組みの結果》

・いけよんプロジェクトでは、医療と福祉の連携という部分で1番大切な顔の見える関係を築くことが出来た。地域課題を題材とした勉強会を行うことにより、医療と福祉の共通理解を深めることも出来た。医師とのコミュニケーションを苦手としていた福祉従事者から、日頃の仕事にも活かすことが出来ているとの声もあった。

・アートカフェでは日常生活圏域に着目し、養浩荘事業部職員、民生委員やコミュニティソーシャルワーカー等が協働し、集う場として地域住民との距離を縮めることができた。「認知症」や「高齢者」に限定せず地域住民に開放することで、より多くの方に専門職を身近に感じて頂けた。

#### ・顔みて食べよう会

参加しやすい食事会をきっかけに、養浩荘を身近に感じるようになって頂けた。管理栄養士のレシピは参加者に好評。

養浩荘事業部職員も食事会に同席することで、地域住民の生の声を聴くことができている。

### 《5. 考察、まとめ》

地域に点在している社会資源に事業部として関わったことにより、養浩荘事業部職員が地域により目を向けるようになり、地域の一員として自覚を持つようになった。様々な切り口のきっかけを作ることで、地域交流が促進され、地域住民や専門機関のネットワークを形成することができた。

### 《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

### 《7. 参考文献》

- ・朝日新聞社 CSR 推進部 (2015)「認知症カフェを語る とともに生き、支え合う地域をめざして」株式会社メディア・ケアプラス
- ・豊島区、豊島区民社会福祉協議会 (2015)「このまちでみんなと生きていく」～コミュニティソーシャルワーク・フォーラム～豊島区、豊島区民社会福祉協議会

### 《8. 提案と発信》

地域にある潜在的、顕在的な資源を幅広く活用することで、今までにない発想や出会いが生まれる。その結果、地域に合わせた支援や日常生活圏域内での支援が可能となり、安心して暮らし続けることができる社会を形成できると考えている。引き続き、地域課題を共有し、地域の強みを活かせるような取り組みを継続していきたい。